

# 大変ですよ

ガーデンそよかぜ園主

安藤敏夫

千葉大学を定年退職したのは平成24年3月。それから5年になろうとしているが、何かの役に立つかもしれないと、つれづれ書いてみる。

「男は死ぬ準備をしなければならない」と言ったのはビートたけしだ。「男は死にたくないと思ひ、女は死なないと思っている」と私は思う。だからこのメッセージは、若くない男性にだけは伝わるかもしれない。「Stay foolish」はスティーブ・ジョブズ。しかし、馬鹿と阿呆の絡み合う世の中、特別な馬鹿になろうとしたら、大変ですよ。

## 退職シンドローム

サラリーマンにとって退職というのは人生の大事件。非常に大きな精神的ショックを受けるようだ。退職後は何をしたものか、途方にくれる人がいる。退職の二文字から逃れられないのに、旧職にしがみつく人がいる。あと何年生きられるか、計算を始める人がいる。「前期高齢者」「後期高齢者」という官製用語。はたまた「終期高齢者」に「末期高齢者」という自分のジョークに、自分でめげる、などなど、大変ですよ。

ともかく、退職事件によって突然、「余生」というやつが始まり、「老い」と「死」に頭を占拠された「老人」になってしまう。これはどうも「退職シンドローム」とでも言うべき、「うつ状態」ではないかと思うが、どうだろうか。

こうした男たちに共通なのは、「受動的」に、受け身でこの事件に向き合っていることだろう。自営業にこんな事件はない。引退とか隠居は「能動的」に自分で決めるだけだから。また、事件後の生活が「消費的」であり、「生産的」でなく、まして「創造的」ではないことも共通だ。まだある。ボランティアなどの「脇役」に回り、「主役」を避けようとする点もある。

これでは肉体だけでなく、精神も老化してしまうのではないだろうか。

ならば、第二の人生は自営業に限る。退職はないし、生産的だし、小さくても主役だし。死はお天道さまにお任せで、Stay foolishには自信があるから、私は

Stay active. Stay creative.で行こう。園芸農家として、常に活動的に創造的に・・・ということで、こうなったのです。

経緯は末尾に時系列でまとめてある。

## スタート台

学生のとき、「園芸農家になりたい」と言ったら、蔬菜の藤井健男先生に「無理だよ。農家は世襲だから」と一刀両断。確かにその時代、農業に新規参入を阻む農地法は元気だった。で、いつのまにか大学教授に。そして退職。時代は変わり、二十歳の夢を叶えるチャンスがやってきた、とは言うものの、スタート台に立つまでですら、紆余曲折、暗中模索を強いられた。非農家の私には、一軒の農家を新作する必要があった。

これが想像以上の大仕事で、家を建てるより経費が嵩んだ。鍬や鎌、スコップに始まり、刈り払い機、草刈機、トラクター、タイヤローダーなどなど、大型小型の農機具はゼロから揃える。様々な工具も必要。軽トラも。第二農場には井戸も掘った。事務所も、パートさんの居室も、トイレも。農機具収納用のハウス、移植作業用のハウス。大変ですよ。

平成26年6月、「ご職業は？」と、問われたら「農業です」と答えられようになった。でもこれで、やっとスタート台に立つことができただけだ。だが、言葉を換えれば、自分の職場と、収入を得るための最低の仕組みを自作した、とは言えそうだ。もし、あなたが農家の子弟ならこの過程はいらない。うらやましい。親に感謝するだけでいい。

## 第一農場

最初にお借りした500坪の農地を第一農場とよんでいる。そこにあったハウス7本を譲り受けたが、周囲を大きな森に囲まれた谷底のような土地なので、冬は北側の3本しか使えない。また、それも側窓が狭くて、夏は使えない。一方で、私たちが「野田の軽井沢」とよんでいるほど、森から吹き降ろす風が涼しくて、南側の1本は、夏の繁殖には好適である。ただ、井水が

悪くて、泥が混ざるので、飲めないばかりか、ノズルが詰まってパイプ灌水がやっかいだ。

作れば売れる時代はとっくに終わり、安値安値の時代だから、与えられたこの環境で可能なのは、耐寒性のシュラブや宿根草に限った少量多品目のネット販売ではないか、と考えた。家を建ててから3,000品種も集めたという横井政人先生の真似をして、作った経験のない草木をやたらに集めて栽培した。よく育つものは、別途、近隣にお借りした畑に植え出して、母本として増殖を待つことにした。

だがこの道は挫折してしまった。与えられたハウスの使い勝手があまりに良くないこともある。昨今のパートさんに、匍匐前進を強いる畑の除草を頼むのは難しく、少ししか離れていない畑なのに、母本の管理が手薄になって、雑草に負けだしたこともある。だが最大の原因は私自身にあった。私と同じようにゼロからスタートしたのに、今や巨大な南米の日本人花作りを知っている私には、その零細さが耐えられなかった。第二農場に別の道が見えたこともある。

## 第二農場

第一農場を始めてから2年ちょっとして転機が訪れ、200mしか離れていない1枚5反超の農地を借りられることになった。非農家にとって、農地法はあまりに過酷である。国家の食料安全保障の基盤とはいえ、新規参入を拒んで、農業を衰退させた一因でもある。農業委員会は、一挙に5反(5,000㎡)以上でなければ、農地の賃借・取得を認めない。つまり農業への参入を許可しない。私は、いわばもぐりで農業を始めていたのだ。

遺産相続にもめたらしく、そこはクズが全面を覆う荒野になっていた。それを地主さんが整地して農地に戻したものの、スギナは退治できず、借り手は私しかいなかった。防草シートは1㎡100円、5反覆っても50万円。その上にハウスを建てればいい。これなら私にもできる。ついでに隣接した2反の農地も別の地主さんから賃借したので、1枚7反となって、鷹の舞う大きな森が遠くになって、見晴らしがよくなった。ここにいるだけで気分が爽快。

正式に農地を賃借したのは平成26年7月。まず60mの井戸を掘った。幸い水は良かった。そしてハウスの建設を始めた。パイプは19mm、間口2間半、長さほぼ50mの遮光ネットハウスを、月に1本のペースで5本建てたところで軍資金が底をついた。開閉できる遮光ネットで覆っただけの、手抜き満載の簡単ハウスで、

ドアはない。だから軽トラでドドドと入れる。耐寒性日陰植物の生産用だが、やはり雨除けは必要だったかもしれないと反省している。

借金はしない。嫁さんに金銭的な迷惑はかけられないから。もっとも貸す人もいないけど。なので、売上から投資するしかない。ハウス建設のペースはガクリ落ちた。第6ハウス以降はP0フィルムハウス。パイプは22mm。ドアはある。手抜きはない。間口を狭くしたのは、野菜ハウスに学んだ暑さ対策。幅4mの天井は固定だが、側面はそれぞれ幅2m巻き上げられる。いわばハーフオープン構造で通風がいい。本来、冬対策としてのハウスだが、夏対策の方が重要で、また難しい。これでなんとか夏でも作れる構造となった。全て手作り。特に、7本目の骨格は100%一人で作った。綺麗にできた。いい汗をかいたが、ヘロツた。もうじき助っ人を頼んでフィルムを張る。

敷地にはハウスが13本建てられるから、あと6本。そうすれば2,800㎡のハウス群となる。残る3反は畑として使う。まあ、そうすれば食っていけるだろう、倒産しなければね。それにしても、大変ですよ。

## 通勤農業

農場は自宅から25kmも離れているから、大学時代の2倍もの距離を、年間360日は通勤している。22万キロも走った車の後輪が、ガガガガガと外れそうになった。大変ですよ。修理より買い替えを勧められて、修理工場にあった軽自動車を瞬時に買った。エステイマに乗っていた大学教授が、後ろの凹んだ軽自動車に。人はこれを哀れと言うようです。それはともかく、経費削減とはいいいながら、軽で高速を走るのはいくはないなあ。

近くに家を借りる事も検討したが、通勤より経費高。なにより嫁さんの「これでお別れね」の笑顔に降参。大変ですよ。

## 土の問題

私のような新規参入の鉢物作りにとって、土は大きな問題ではないだろうか。鉢物生産には当然、品質の安定した「いい土」が大量に必要な。培地ミックスとして購入するなら簡便だが、私にその度胸はない。培地を自作するとしたら、用土の安定確保、混合・運搬は大きな問題となる。私はまだここを乗り越えられない。

トラクター（もちろん中古）と、0.3立米バケットのタイヤローダー（当然中古）を購入して、効率は格

段に上がったが、狭い第一農場では、目指す用土に混合できない。第二農場に広い土置き場、混合場所を作る予定だが、農地であるため、コンクリートを打てないから、土壌病害の問題は残るだろう。

## 作目

全国に花き生産者がいて、それぞれ独自のドメインを確保し展開しているなか、この時代の新規参入に残された隙間は多くない。作れば売れた1960年代、私の二十歳の頃とは事情が全く違う。リスクを伴うが、開拓者でなければ参入できない。5本の遮光ネットハウスは、「日陰を明るく美しく」を標語にして、シェードガーデン素材という新たなドメインを狙ったもので、相応の素材が入っている。

最初に出荷したのはタガネソウ。ササスゲという別名で商品化した。日本の植物なのに、恥ずかしながら退職までこの植物を知らなかった。いくつかの品種は大変美しく、感動したこともあって、のめり込んだ。50%遮光のトンネルに地植えすればどんどん増える。最終ゴールは、落葉性であることが欠点とならない寒地・雪国用のグラウンドカバー。最初は鉢物としての市場出荷をしたが、ボリュームに問題があったこともあり、水切れと風に弱く、葉が痛んだら回復しないことで、評判を落とした。北海道の造園素材として、ポツポツ使われており、品種を絞って生産を継続している。

今の主力商品はオオシマカンスゲ (*Carex oshimensis*)。伊豆諸島の現生だが、アイルランドで育種された、いくつかのпатент品種が里帰りしている。畑で株を養生して、掘り上げ、株分けして小鉢にとる。安値の時代に、一株30円のロイヤルティは厳しかったため、5~6号の大鉢生産が主流となっているから、その苗として、私の作る2.5号鉢が使われるようになった。施設の狭い私には大鉢生産は難しいが、畑で株を養生する方法は、施設園芸とは縁遠いので、そこにはそれなりのドメインが存在するようだ。最終的には、寄せ植えの脇役としての2.5号鉢の出荷を目指しているが、技術に課題がある。

その他、シマカンスゲ (*Carex* ‘Gold Band’)、クサソテツ、ヤマアジサイ、トラフカンスゲなどは、販売にまで漕ぎ着けている。トキワナルコユリを1万、来春用に準備している。

## 育種

「開発なき産業は減じる」し、生産者育種の提唱者

たる者として、私には育種が不可欠なのだが、なかなかそこまで行けない。カレックスの既入りをいくつか作ったが、狙ったものはまだ出ない。キキョウもやっている。山草店で入手した3株の種子から、6000株を育てて、変異を抜き出した。キキョウに可能性を感じる。一つの柱にするつもりだが、のめり込むのが恐ろしい。育種と女性の甘い誘いに弱いんだよなあ。大変ですよ。

## 目的

馬鹿にも目的はあるものだ。第一の目的は健康管理。農業は健康にいいと信じる。日焼けと、いい汗、それは農業の醍醐味。第一農場の地主さんは90歳。今日も備中でヤツガシラを掘り起こしていた。でっかい株にはウンボを振り回す。耳も目も正常。言葉だけは分かりにくい、方言のせいだ。古稀の私に向かって「まだ君には分からないだろうけど・・・」人生訓にも耳を傾ける価値がある。太陽のもとでの日々の労働、これが健康の秘訣に違いない。いい汗をかいたらすぐ、水代わりにコップ一杯の牛乳を飲む。すると筋肉が再生しやすいのか、次回の作業が格段と楽になる。重労働もするが、これまで体を傷めたことはない。

第二の目的は、旧職と関係がある。園芸別科の入学試験には面接があって、後継者には全員、「目標とする年商」を質問してきた。「目標を年商1億円、と言わないと入学させないぞ」とも暴言もはいたが、首にならなかった。園芸学部はいいところだ。この先を公言するのは初めてなので、少し恥ずかしいが、私自身の頭と体を使って、彼らほどの時間はないものの、どうしたらこの数字に近づけるものなのか、その道筋を思索してみたい。それが実学の教授としての、学生に対する責任の取り方だろうと思うから。大変ですよ。

第三の目的は、目的というより夢のまた夢だが、もしこの農場を軌道に乗せることができたなら、教え子や後輩に農場をそっくり譲り、私は隠居して、「育種に先導された花き生産」を継承してもらうことだ。息子も娘も別の道にいるから、私には「世襲としての後継者」はいない。だが、教え子なら沢山いるし、後輩はどんどん増える。「農業は世襲だから」と、はじかれた、私が二十歳の頃とは時代が違うとはいえ、ここに記したようにゼロからのスタートは、蓄えのない若者にとって非常に険しい。こうした花き生産を目指す非農家の若者に、スタート台を提供したい。また「退職シンドローム」に悩むかもしれない、サラリーマンになった教え子には、第二の人生の受け皿として農場

を提供したい。

## これまでの結論

始めたばかりだが、それでもいくつかの結論は出てきた。第一の結論は「自営業は夫婦でやるもの」ということ。嫁さんは健在だが、あっちの方を向いているので、対等な立場で背中を押してくれる人が農場にいない。親身でなくてもいい、無責任でもいい、足を引っ張ってもいい、無駄口ばかりでもいい、それでも対等な立場の相手なら、エネルギー源になると思うほど。一人じゃ面白くないよ。カラスやタヌキじゃ話にならない。大変ですよ。

これはまだ秘密だが、それでも感謝すべきは嫁さん、という結論にも達しそうだ。独立心が強く、私の扶養者ではなく、会計は互いに独立だから、私は、毎月一定額を納付するだけでいい。こんな馬鹿のできる源泉は嫁さんにある。語弊があるかな。

書きたくはないが、やっと分かってきた。どうやら私には経営センスがないらしい。大学の成績で言うと、61点くらいらしい。まだ破綻してないから、不可ではないとしても、最低水準であることは間違いない。度胸がないのか、軍資金が不安なのか、ヒットが打てない。才能がないんだよな、きっと。どうしましょ。大変ですよ。土壌肥料と病虫害の勉強が足りなかったことも、露呈し始めた。どうしましょ。大変ですよ。

はい、おしまい。時間切れです。

## 農場の時系列データ

平成23年7月、中島栄一氏の仲介で、千葉県野田市瀬戸998に500坪の土地を借りる機会を得た。地主さんは寺田繁夫氏(野田市瀬戸1092)、地代は30,000円/年。ここはそれまで五十嵐勝芳氏が鉢植えの植木を生産してきた場所で、30年物のビニールハウス(長さ10間のハウス、間口2.5間が1本、3間が6本)、物置、井戸、1tトラックなどの生産施設が残り、それらが無償で譲り受けることができた。借地に先立って、これらの施設を全て撤去して更地に戻す経費として、100万円を地主さんに預託した。ここを第一農場と称している。

平成24年3月、千葉大学を定年退職。その直前に、この土地に4坪のユニットハウスを設置して事務所とし、研究室にあった様々な物品を移動した。

平成24年4月からほぼ1年、パートさんの居室、水洗トイレ、挿芽用ハウス、車両用ハウスなどの付帯工事。

平成25年3月、松戸税務署に個人経営主として登記。

恥ずかしながら、屋号を「ガーデンそよかぜ」と称する個人経営主となった。

平成26年6月9日、農地法第3条の規定による農地の賃借権設定の申請を野田市農業委員会に提出。6月24日に農業委員会は、私(松戸市六実4-14-1-408)と、船見千代子氏(野田市瀬戸1053)の間の農地(瀬戸1074、1084、1085-1、1086-1:計5,594㎡)の賃借権設定を許可(野農委指令3305号)。契約期間は平成26年7月1日から10年間。対価は84,000円/年。ここに防草シートを張った上に、間口2.5間(4.5m)、長さ27間(48.6m)、パイプ径19mmの遮光ネットハウスを5本(1本は少し短い)(部材は1本30万円)、同サイズのパイプ径22mmのPOフィルムハウスを2本(1本は近々完成)(部材は1本50万円)を自作した。ここに計13本のハウスを設置する計画。ここを第二農場と称している。なるべく早く、第一農場から撤退して、施設を第二農場に集約したいと考えている。